

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	小林広直
論文題目	ジェイムズ・ジョイスの作品における亡霊表象の研究——トラウマ、事後性、歴史
審査要旨	
<p>本論文は、二十世紀のアイルランド作家ジェイムズ・ジョイスの作品から『ダブリナーズ』、『若き日の藝術家の肖像』、『ユリシーズ』を採上げ、それぞれに見られる亡霊表象に着目し、それが作者の「個人史(personal history)」と、世紀転換期アイルランドの「民族史(national history)」の双方における「トラウマ的経験(traumatic experience)」と深く関はつてゐることを検証したものである。</p> <p>筆者はポストコロニアリズムによるジョイス論を継承する立場を採つてゐるが、ポストコロニアリズムを宗主国による政治支配が終つた植民地「以後」ではなく、なほも文化支配が続く「後期」植民地主義と捉へ直し、その観点から亡霊表象の意味を分析する。その際ジョイス研究では比較的参照されることの少い「トラウマ研究(Trauma Studies)」と「亡霊研究(Ghost Studies)」を巧みに援用することで自己の論を揺るぎなく推し進めてゐる。ここに本論文の独創性が認められる。</p> <p>本論文は三章、全十節から成るが、序論では全体の理論的枠組と議論の問題点が整理されてゐる。まづ、亡霊表象を理論的に位置づけるべく、「トラウマ」と「事後性」といふ精神分析上の二つの概念が考察される。いづれもジークムント・フロイトが生涯にわたって追求したものであるが、彼は明確な定義を残すことがなかつたため、筆者はジャン・ラプランシュとキャシー・カルースの知見を援用し、トラウマの概念を「繰り返し想起せずにはいられない過去の痛ましい出来事への反応」といふ意に拡大する。主体は自らのトラウマ体験を事後的に認識し、解釈しようとする過程を通じて、鳥瞰的な視座を得ることが出来、同時にトラウマ的経験は、それが過ぎ去つた過去の出来事として理解されるのではなく、忘却されないといふ点で亡霊的であり、haunting であるとする。亡霊に遭遇するといふトラウマ的経験はその出来事が起きた時点ではなく、主体によって事後的に理解されるといふこと——この時間差が、作家ジョイスが歴史をどのやうに捉へてゐたか、といふより大きな問題に接続されうることを筆者は提起してゐる。</p> <p>第一章では、ジョイス唯一の短篇集『ダブリナーズ』から「姉妹たち」「痛ましい事件」「死者たち」の三作品を採上げ、いづれの作品にも亡霊(的存在)が登場すること、そしてそれぞれの物語の主人公が作者の「否定的分身(negative portrait)」であることの意義を検討してゐる。第一節で扱はれた「姉妹たち」は、主人公の少年が懇意にしてゐた神父の死を経験する物語である。少年は死の知らせを聞いた夜に、夢の中で神父の「灰色の顔」に遭遇するが、その顔は不気味に微笑んでゐる。そして翌日、弔問に訪れた際、神父の亡骸が微笑んでゐないことに衝撃を受け、神父が聖職を辞する契機となつた事件——聖杯を壊してしまつたこと——の真相を聞かされる。筆者は、カトリズムの象徴である神父の遺体を見るといふ経験がトラウマ的であつたことを、この物語が少年の視点を採りながらものちに大人になつた語手によつて語られてゐるといふ事後性の観点から着目し、このやうな二重の語りを採用するジョイス自身がカトリック教会の支配からいかに逃れうるか抵抗を目指してゐると読解した。第二節「痛ましい事件」論では、従来エゴイズムの権化と解釈されてきた中年独身の主人公、ダフィー氏が、シニコウ夫人の亡霊と出会ふことで、主人公も気がつかない形で、他者を歓待することの意義がテキストに書込まれてゐることを、ジャック・デリダの憑在論と歓待論を参照しながら論じてゐる。第三節の「死者たち」では、大学教師の主人公ゲイブリエルが論じられる。彼の妻グレタは、娘時代に懇意にしてゐたマイケル・フエアリーの死を経験する。グレタにとっては、フエアリーの死が、ゲイブリエルにとっては、初めて聞かされた妻の若き日の恋物語が、トラウマ的経験であつた。フエアリーが「亡霊のような青白い」ガス灯の光となつて照らすホテルの一室で、ゲイブリエルがパーティ・スピーチで言祝いだ歓待の精神は、本人も気づかない形で、妻の他者性だけでなく、己の自我を危機に陥れる死者の存在をも受容れることを倫理的に要請してゐると筆者は指摘する。</p>	

第二章では、ジョイスの自伝的教養小説『若き日の藝術家の肖像』が、四節に分けて論じられてゐる。最初の二節ではカトリズムの問題が、後半の二節では植民地アイルランドの歴史状況が分析の対象となつてゐる。第一節では、『肖像』の「序」を締めくくる「あやまれ／おめめをくりぬくよ」といふリフレインの意味が考察される。言葉を覚えたばかりの主人公スティーヴンには、この言葉が妄信的なカトリック信者のダンテから発せられてゐることの意義——教会に従はなければ、罰せられること——がまだわかつてゐないが、作者は幸福な幼少期の記憶をこのやうに締めくくることで、のちにスティーヴンが聖職者ではなく藝術家への道を歩むことを暗示する最初のトラウマ的体験として、事後的に主人公自身が悟るやうに構造化してゐると筆者は指摘する。第二節は、『肖像』第三章の「地獄の説教」が論じられてゐる。娼婦と交はつた十六歳の主人公は、学校では優等生であり、聖職に就くことを期待されてゐる。そんな中でアーノル神父によつてなされた地獄の説教は、まさしく彼にとつてトラウマ的経験であつた。しかし作者ジョイスは、神父の説教にいくつもの事実誤認や誇張を書込むことで、説教の正当性、延いてはカトリズムの正当性を切り崩してゐることを、筆者は、説教のモデルとなつたイエズス会士ピナモンティのイタリア語原著と英訳に加へ、数種の英訳聖書を参照することで論証してゐる。第三節では、『肖像』に登場する「歴史」といふ言葉に着目し、主人公は成長するにつれて、歴史が単なる偉人たちの「お話(tale)」ではなく、亡霊たちの歴史でもあること、すなはち植民地であつたアイルランドにおいて独立運動に敗れた不遇な歴史上の人物たちが今なほ完全に死んでしまつたわけではないことを自覚してゆく。この歴史観の変化は、のちに『ユリシーズ』でスティーヴンが述べる「悪夢としての歴史」から遡及的に導かれることを筆者は論じる。第四節では、一七九八年の反乱の首謀者であるウルフ・トーンについて論じられる。従来は、ジョイス自身も敬愛していた一九世紀末の自治運動の志士、チャールズ・スチュアート・パーネルとの関連で議論されることの多い『肖像』であるが、作品第一章の舞台であるクロンゴウズ校には独立運動に参加したほかの政治家や革命家が関はつてゐたといふ事実を、主人公であるスティーヴンにはその意義までは気づかぬ形で作者は書込んでゐる。まさに埋葬されてゐる亡霊的なトーンの存在に気づくことが、主人公が成長するにつれて体得すべき歴史観であつた。そのことが、『肖像』の第一章と第五章の比較の中で浮び上がつてゐる。

第三章では、『ユリシーズ』におけるスティーヴンの母の亡霊が中心的に論じられてゐる。ジョイスが二十一歳で経験した母の死は、作家になる以前の彼の人生の中で最も大きなトラウマ的経験であると云へる。しかし『肖像』は大学卒業の二十歳まで、『ユリシーズ』は二十二歳のスティーヴンが過ごす六月の或る一日が描かれ、母の死が直接作品に描かれることはない。まもなく母の死の一周忌を迎へるスティーヴンが、夢の中で遭遇する母の亡霊は単に個人的なトラウマ的経験を暗示するだけではなく、アイルランドを支配する宗教権力(カトリック教会)と政治権力(大英帝国)——スティーヴンの云ふ「二人の主人」——とも深く関はつてゐる。それが本論文第三章の検証対象である。第一節では、スティーヴンの同居人であるマリガンが口にした「ひどい死に方(beastly dead)」といふ言葉のシニフィア的な意義が多角的に検証されてゐる。マリガンにとつてはさほど深い意味があるわけではない *beastly* の一語が、母の臨終の苦しみに立ち会ひ、息子の信仰の喪失を糾弾する母の亡霊(食屍鬼と呼ばれる)の夢を見たスティーヴンには、まさしく獣のやうな「おぞましいもの」として感得される。同時に、この動物といふ論点は『ユリシーズ』冒頭の三挿話に頻出する動物のイメージと重なり合つてゐる。マリガンから「使い走り(dogsbody)」と云はれ、生徒から「おぼけの話(ghoststory)」をせがまれたスティーヴンは、毛に血の臭ひをさせた狐にまつはる謎なぞを想起し、海岸では溺死した犬に駆け寄り犬を目撃する。一見無関係に見えるこれらのイメージが第十五挿話「キルケ」でさらに重層化されてゐることを論じたのが、第二節である。ここでは亡霊といふ点から、スティーヴンの母とつい昨日死んだディグナムが結びつき、両者が歴史的に虐げられてきたアイルランド人の表象となつてゐることを筆者は指摘する。第三節では、再度「悪夢としての歴史」の問題が論じられる。スティーヴンが自らを小さくしか評価出来ないことが、自分が例の「二人の主人」の「召使い」であるだけでなく、マーテロ塔の客人ヘインズが英国人として、マリガンが支配者に阿るアイルランド人として象徴化されてゐることからも検証される。また、歴史が主題である第二挿話に登場するアングロ・アイリッシュの校長ディージーは、ホメロスとの照応関係で云へば賢者であるはずだが、反ユダヤ主義と女性嫌悪の持主であるため、スティーヴンは彼から歴史を学ぶことが出来ない。ディージーのキリスト教終末論的

な歴史観に対し、ステューヴンは「通りの叫び声」が神だと云ふ。この対立は、大きな物語としての歴史に対してローカルで個人的な歴史をぶつけることであり、さらにはアリストテレスの「可能態としての歴史」を意識してゐる彼にとっては、あり得たはずの歴史のための抵抗手段となる。一般にジョイスは審美主義的、藝術至上主義的なモダニズム文学の大家で、祖国復興のための政治運動には背を向けた作家と見なされがちであるが、筆者はジョイスの創造の源泉を単に新たな表現方法を発明したロマン派的な天才性に見るのではなく、作品制作の動機に作家自身のトラウマ克服の試みをも見ることによつて、最終的には、作品、特に『ユリシーズ』をアリストテレスの所謂「可能態としての歴史」と位置づけ、「藝術主義の政治化」とも云ふべき、ジョイスに隠された政治性を炙り出した。

去る一月十三日に行はれた公開審査会では、本論に対して次のやうな意見が審査員から出された。①第一章と第二章に比べ、第三章のまとまりが少し弱いやうに感じられる。②『ダブリナーズ』を麻痺とノーモンの二点から解釈する従来の研究に、トラウマといふ新たな概念を付け加へたことは高く評価出来る。ただし、この個人史と民族史を亡霊表象が架橋するといふ方法は、ジョイスの最後の作品である『フィネガンズ・ウェイク』にまで応用出来るかどうか疑問がないわけではない。③英語圏で書かれた最新の研究成果だけでなく、日本人の先行研究の成果も取り込まれてゐることは高く評価出来る。今後日本人の研究者として日本語で書かれた研究成果をいかに英語で発表してゆくかは興味深い点の一つである。④今日蔑ろにされることの多い「精読」の可能性を示してゐる点、トラウマをトラウマ的なもの、亡霊を亡霊的なものへと拡大して理論化することで、つながりが見えなかつた個々の表象を繋ぎ合せてゐる点に本論の独自性が見られる。ただし、事後性については(1)終点があるもの＝トラウマが克服される(2)終点のないもの＝乗越えられないトラウマ、の二点があるはずで、さらに云へば、事後性は言語一般が持つ性質である「失はれた現前性」との関連で、「差延」との区別が必要である。また、ジョイス作品独自の事後性を炙り出すために、彼の美学用語である「エピファニー」との関連が論究される必要があるのではないか。⑤デリダの歓待論を応用したことは評価出来るが、死者や亡霊の声なき声に耳を傾けることが即座に「応答」と呼び得るのか、もう少し細かい議論が必要だつたのではないか。その意味で、ジョイスの「分身」である主人公達だけでなく、他の登場人物への論究もあつてしかるべきではないか。

以上、幾つか問題点がないわけではないが、論文全体の出来栄えに大きく影響するものではなく、先行研究の量が龐大であり、新しい論点を見つけることが容易ではないジョイス研究において、本論が亡霊表象といふ方法論的観点を採用することにより、各作品の一見無関係に見える要素を論理的に繋ぎ合せてゆく読解の手法は実に見事である。ジョイス研究史における筆者自身の立場の位置づけ、内外の先行研究の博搜と消化、テキストの精読、自己の論を支へる理論的支柱の構成、論旨の説得力、いづれの点においても優れ、本論文は課程博士学位の授与に相応しい論文であると評価出来る。

公開審査会開催日	2018年1月13日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大島 一彦	英文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	棚木 伸明	英文学	
審査委員	一橋大学法学研究科・教授	金井 嘉彦	英文学	
審査委員				
審査委員				